

---

# 異世界から来た召喚士の日常

めりこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界から来た召喚士の日常

### 【Nコード】

N6700X

### 【作者名】

めりこ

### 【あらすじ】

神様のお願いで異世界にきた白木薫。神様からの依頼は済んだので後はただらと異世界ライフを満喫します。

ぶるるーぐ

「ででーん、あなたは死んでしまいました」

……え？

「You die」

……そんな記憶一切ないんですけど？というかあなた誰ですか？  
ここは？

「いつぺんに質問すんなよな。とりあえず答えるけどさ。記憶ないのは消したから。俺は神様。ここは生と死の狭間ってところか」

記憶消してたんですか？え、カミサマ？死んだのに狭間にいるの？

2

「説明すつから落ち着けよ。とりあえず確認しておくけどお前名前と年齢わかるか？」

……白木 薫。 18歳。

「オーケー。まず死因からな。  
これ老衰、89歳で大往生。 18歳以降の記憶は消させてもらった。」

記憶消した説明は後でな。老衰でくたばったお前の魂をとある理由でここに引っ張ったのが俺  
ここまではいいかいボーイ？」

……なんで微妙にアメリカナイズしたしゃべり方なんすか？

「それは趣味。んじゃ次はここに呼んだ理由な。」

お前がいた世界は俺の管轄なんだけど、ちよつと知り合いの管理する世界で問題が起こってな。」

こつちの世界からあつちの世界に人間を召喚する魔法を開発した馬鹿がいてな。」

『偶然召喚しちゃいましたてへ ミ』ならまだ良いんだが、何人も継続的に持つていかれるとバランスが崩れて困ったことになるんだわ。」

で、知り合いと相談した結果、幸いまだ試験運用の段階だからその開発した馬鹿を消してしまおうってことになった。」

というわけでこつちから一人送る必要があるんだが、今生きてるやつは自分の人生があるわけだし、

輪廻転生に乗ってない魂を使おうってことで、丁度くたばったお前さんに白羽の矢が立ったというわけさ。」

輪廻転生あるんすね、仏教系の神様？

「突っ込みはそこで良いのかい薰ちゃん？ 仏教系とかよりもっと上の神様だよ。」

正直ツツコミが追いつかないつす。

体の感覚ないから事実だとして、魂のままで良いの？

ああ、記憶消した理由ってのは？

「記憶消したのは89歳の脳みそじゃ理解できないだろうから。あとは向こう行ったときにも耐えらんなくなりそうだから？」

体は好きなの作ってやんぜ。あとは……ああ、人殺しにはまだ抵抗あるだろうからそれ対策の力もやろつ<sup>チート</sup>。」

確かに爺の脳みそじゃ理解できんだろうな。  
体好きなの作れるなら可愛い服着たいから美少女で!!  
それとチートは選べるの？

「美少女はともかくなんだその理由は？ロリコンなのか？  
チート<sup>チート</sup>サモン<sup>サモン</sup>力は召喚能力な。一応向こうの世界には普通に召喚能力自体はあ  
るけどちよつと強化してある」

ロリコン違う！可愛いものが大好きなだけだ！そこに性欲は一切  
ない！

……無駄に体ごついからそういうの自分ではできないからさ。着  
飾るのって結構夢なんだ。

「イケメンになりたいとかじゃないんだな」

他人にコレ着てアレ着てって頼めないやん？

「そういう時は子供に着せるとかじゃないかい？

ああ、結婚できるかわからないもんな。一応結婚はしてたはずだ  
けど、今は記憶消してるしなあ」

結婚できたのか、頑張ったんだな俺……！

「はいはい、話それてるわよ？こっからは私が引き継ぐわよ薫ちや  
ん」

……あつちの世界の神様？

「はい正解。やっぱり脳みそ若返らせてて良かったみたいね。

じゃあとりえずは身体作っちゃいましょうか。美少女が良いらしいけど、具体的にどういうのが良いの？

なにか参考になるのがあれば一番楽なだけど？」

え〜っと……改めて言われると困るね。

「漫画とかでも良いぜ、出してやるから。俺のお勧めは長」

「私のお勧めはキョ 子ね」

ハ ヒだと鶴 さんが良いなあ、って神様え……

なんで異世界の神様までハ ヒのディープなところまで知ってんすか……

「俺が引き込んだ」

「コミケは必ず参加しますがなにか？」

なんでもないです……

顔の造型はお任せしますんで、各パーツをある程度指定していいですか？

ああ、黒髪黒目がないとかってありますか？

「はいはい了解つと。心配しなくても黒髪黒目は普通にいるわよ。ピンク髪とかも普通にいるから何でもいけるわよ。あ、もちろん獣人とかもいるからね？」

ネコミミかあ。それも良いけど常時だとちょっと辛いかなあ。

んじゃあ元気なタイプの可愛い系で黒髪ストレートの黒目で。

150cmぐらいのスリムっていうかスレンダーな体つきでお願い

いします。

「もちろん好みでまくりだなおい。それお前の好きなタイプだろ」

そうですが何か？

「はいはい。じゃあそれで用意しておくわね。あとは魔法についてね。

一応力があるわけだし、魔力は多めで設定しておくけどバランス考えて召喚能力以外の魔法は初級のみ使用可能にしておくわ。

それで召喚能力に関してなんだけど、ここに一冊の手帳があります。

これに契約した相手のみ呼び出せるということ。既にいくつか載せてあるけど、物足りなくなったら自分で契約してね。

この辺はこっちにきたら理解できるようにしておくわ。何か質問ある？」

それなんてH A     T E Dじゃ     しょん？

やっぱり詠唱はどこそこで事件発生おいでませ何々さん？

「そこまでパク……普通に召喚何々よ。こっちに来たときは最初に1ページ目のを呼び出してね？そいつが馬鹿を処分してくれるから」

了解シマシタ。

そついや召喚って永続型？単発型？

「あつちの召喚士は単発型だな。常時呼び出しておくには魔力が足りん」

「でもあなたは永続型ね？そのために魔力多くしてあるし、本体は

初級魔法しか使えないようにしてあるから。

おそらく召喚士<sup>サモナー</sup>じゃなくて獣使い<sup>ビーストテイマー</sup>だと思われるんじゃないかしら」

それ結構問題にならない？

「だから言っただろう、チートだと。とはいえそういう存在がいな  
いこともないんだよな。

魔力が高いやつなら何人か知ってるし、他にもお前それチートだ  
ろって奴も何人か知ってるな」

……知ってる？

「こいつがこっちのコミケ来てるんだから俺が向こうに行っても  
おかしくないだろ？

5年ほど前まで分身<sup>アバター</sup>作って冒険者やってたってわけだ」

なるほど。ってかその分身使って処理すれば良いのでは？

「ちょっと他の用事で遠くにいつてて移動が間に合わんのよ。移動  
呪文とかないからな」

じゃあ向こうで会うこともあるかも知れないですね。

「そうだな、そんな時はよろしくな」

「じゃあそろそろ良いかしら？そろそろこっちの世界に送るわよ？」

ちなみに私はその馬鹿を処分したあとどうすれば？



「もしかしたら何かを頼むことがあるかもしれないけれど、今のところは何も。そのまま異世界ライフを楽しんで?」

了解しました。それではいつでもどうぞ。

「それじゃいくわよ。」

「……ごめんなさいね、こちらの世界のゴタゴタに巻き込まんじやうて」

召喚、そして依頼終了

とある研究所

「よし、あとは起動実験だな」

「異世界の道標をここへ！開け異界への門よ！我が元へ異世界の住人アナザーゲートオープンを呼び出せ！！異世界門開通！」

「成功した！成功した……ぞ？おい、なんか言ってみろ！お前の元いた世界の名前を言ってみろ！！」

「ここは……そうか。あの騒いでるのが神様が言ってた馬鹿か。とりあえず1ページ目を呼び出せと行ってたっけか。」

「……お前が召喚主か？」

「おお、召喚されたことをわかっているのか！すばらしい！！  
そっだ、私がお前を召喚したのだ！さあ跪け！！そしてお前の世界の情報をよこせ！！」

なんでこういう奴って従うこと前提なんだろうな、なんて考える場合じゃないか。

こっついう場合に言う台詞は一つだよな。

「だが断る！召喚黒魔狼！」  
サモン フェンリル

手帳を取り出し1ページ目を開いて召喚獣を呼び出す俺、ついでにうかフェンリルかよ！

結構高位なんじゃねえのこれ？

「アオオオー！ー！ー！」

「ヒイ！なぜ従わない！なぜお前がこちらの魔法を使える！」

「説明する必要ないだろ？どうせすぐ死ぬんだし」

「うわああああー！ー！ー！！炎の」  
フレイ

何か魔法を詠唱しようとしてたようだけど、その瞬間黒魔狼が男の喉笛を噛み切った。

口をパクパクさせながら恐怖が顔に張り付いたまま男は倒れた。

南無。

かっこつけてみたけど無理。血の臭いなんて耐えられるわけないだろ。

うわあ、目の前で人が死んだよ……。やばいやばい泣きそうまずいとりあえずこの部屋出たい。

ちょっと黒魔狼さんなんか知らない？せめて臭いだけでも

「わう！」

無理！つてかてめえこのやるつきばちわる吐く吐きそう吐きたうええええ。

「あゝ……気持ち悪。黒魔……めんどくさいな、クロでいいか。クロちゃん、この建物他に人いるかわかる？」

「わふう」

一人いる？つてかなんて言ってること理解できんのかね俺。呼び出したからか？あゝ、本来の召喚はこういうことか。

だからあいつも呼び出した俺が無条件で従うと思ってたのか。とりあえずもう一人も始末しないとダメなのかなあ、気が重いというか嫌だなあ。

クロちゃんちよつと行って始末してきてくんない？一緒にこい？ワガママな。従えよお前こら。

そうだ、さっきの凍らせとけば臭いしなかったか？もういいか、もう一人んとこ案内しておくれ。

あれ、こんな大それた実験なら関係者なら立ち会ってそうなもんじゃね？いかん、頭まわらん。

「で、クロちゃん。この部屋にもう一人がいると？」

「わふ」

「じゃあクロちゃんよろしく」

え、ドア開ける？ぶち壊せよ。ドア開ける役が一番待ち伏せくらいやすいんだぞ？

は？寝てる？何が。中の人？なんじゃそれ。さっきのおっさん結構大声出してたよな？

思い出したらまた吐きそうになっていた。うええ、おい一步下が  
るな。臭いとかいうなよお……

「おはようございま〜す……」

なんで異世界くんたりまでして早朝寝起きドッキリやねん！

ってかこれって。どう見ても金髪幼女ですほんとうにありがって  
それはおいといて。

普通に考えたら実験体が生贄用ってとこか？

生贄用ってことは俺がもらってもぐへへヤメテクロちゃん白い目  
で見ないで！犬にジト目されるとか何コレイジメ？

「さて、冗談はこれぐらいにしてと。どうしたもんかなあ。お嬢さ  
くん？起きてくださいな〜っと」

ぺちぺち頬叩いてみる。睫毛長いなあこの娘。

「ううん……あと5分」

おい結構余裕あるなこの娘。馬鹿の仲間なのか？

## 出発

爆睡してたお嬢さんはさらわれてきただけらしいです。  
そして現在は

「もふもふ」

クロちゃんにしがみついて離れません。クロちゃんちょっと代わってよ。

幸いさらわれて来たばかりということでもまだ何もされてないそう  
な。

家族の下に送ろうか？と聞いたたら孤児だそうで、クロちゃんが気に入ったので一緒について行きたいと。

一応こっちの神様がインストールしてくれてる知識はあるとはい  
え丁度いいっちゃ丁度良いかかと一緒に行くことにしました。

ちなみになんか男みたいな口調だねなんて言われちゃったので女  
言葉を意識してます。

はわわ、クロちゃんがぐったりしてるよお、ミ 羨ましい奴  
め。

それはまあいいか。おいジト目でこっち見るな。

「じゃあもうここには用はないし近くの町まで行きましようか。ク  
ロちゃん場所わかる？」

「わっふ」

あっち、ってか。簡単だなおい。

そついえばクロちゃん、ここって燃やすなりなんなりしてたほうが良いのかな？

研究資料とか残ってたりするんじゃない？あ、お金とか魔道具とか貰っていつておこつ。

ってよく考えたらどれが魔道具かわからないね。お金だけにしとこ。

金貨5枚と銀貨銅貨がじゃらじゃらと。こつちの貨幣価値わからんね、これは大金なんだろうか？

「そついえばお嬢さん、お名前は？あとこれ、ん〜……宿屋に泊まるのって一泊どれくらいかわかる？」

「あ、わたしレティシアと言います！レティと呼んでください！宿屋の料金はちよつとわかりませんが、それなりに大金だと思いますよそれ。」

それと、今更ですが助けていただいておりますがとうございました。不束者ですがよろしくお願いします」

それなり、かあ。二人で一月ぐらい泊まると良いなあ。

ってかなんか最後おかしくな？

「うん、どういたしました。とりあえずクロちゃん離してもらえないかな？」



「え〜……」

「私は初級魔法しか使えないからね？モンスターとかにでも襲われたら私一人じゃどうしようもないのよ。」

だからお姉さんと手をつないでおこう？げへへ」

「わふ！」

え？口に出てる？何が？冗談に決まってるじゃないか。

ちよっ！そんな目で見ないで！しゃべれないからって無言の圧力は止めて！！

そうか、もう一体呼べばいいのか。手帳手帳と。何体が登録しておくって言ってたよね。

クロちゃんはレティちゃんの専属護衛よろしくね？

私はどうしようかなあ〜……っと良い子いるじゃん

『サモン  
アイスウルフ  
召喚！氷白狼！』

「アオオオオオオー！！」

うんうん、白い狼だね。クロちゃんと対になって良い感じじゃあシロちゃんは私専属でよろしくね？

さて、それじゃあのんびりと異世界ライフを堪能しますか。

忘れてた。馬鹿の家燃やしとかないと。

「フレイムアロー  
炎の矢！」

うええ、また思い出して吐きそう……

## 森にて 1

馬鹿の家から近くの町まで歩いているin森の中 -

神様をお願いされて半ば強制的に始まった私の異世界生活。

あれ断ってたらどうなったのかしらんってよく考えたら是非の確認されてねえ！半ばどころじゃなく完全に強制じゃねえか！！

無事依頼は果たして馬鹿の始末は済んだし、金髪幼女もゲットできたしげへへ。

これなら黒髪じゃなくて銀髪にしたら良かったかなあ。こっちの世界に毛染めとかあるのかな？

そんな魔法があったりしたら嬉しいな。髪の色変え放題になるわけだし。

そういえばクロちゃんとシロちゃんは呼び出しっぱなしにしてあるけど魔力量ってどうなってんのかしらねえ。

なんか女言葉意識するとオネエキャラになっちゃいそう。

それはさておき、確かこっちの世界の召喚士は単発型で呼び出しっぱなしにするほど魔力無いか言ってたなあ。

「ねえ、レティ。召喚士<sup>サモナー</sup>って見たことある？」

「お姉さんがそうじゃないんですか？シロを呼び出していましたよね？」

「私以外は？」

「ありません。確か結構レアだったと思いますけど」

そうかあ。となるとあの時言ってた『ヒーストテイマー獣使いと間違えられる』ってのもそういうことか。

他にあまりいないんじゃないかなあ。フェンリル黒魔狼もアイスウルフ氷白狼も普通にいるってことだよな。

願わくばどちらもモンスターとか魔物とか、駆除される生物じゃないことを祈ろう。

幻獣とか聖獣とかの珍しい生物だったらどうしよう……

「ちなみにレティはこの2匹が何か知ってる？」

「黒い狼と白い狼？以前町で従えてる人は見たことありますけれど珍しい生き物なのですか？」

「いやいや、一応聞いたただだよー」

あんまり気にしなくてもいいのかな。

とりあえず2匹とも魔法はしばらく自重しておこうか。

「わふ」「あおお」

よしよし、良い子良い子。やばい、撫でると止まらなくなるなこの子たち。

毛並み良すぎたる常識で考えて。

町に着いたらどうしようかなと。宿屋探して、ん〜……？  
ああ、インストールされてる神様情報によると冒険者ギルドはあるのね。

……ギルドって概念は向こうの世界から持ち込んだっばいな。こんな詳細までいらぬのに。

えーっと？F〜Aのランク制で登録初期はFからか、基本だね。

あとは依頼こなしの数か、昇級試験突破で上がっていくと。

あれ、依頼は宿屋や酒場でも受けられるのか。通信関係が発達してんのかな。

宿屋や酒場だち独自に依頼があったりするのか、ふむふむ。

どうせ登録するときの説明受けるだろうから詳しくはそんな時でいいか！

「とりあえず宿屋と旨いものだー！」

「お〜！」

森にて 1 (後書き)

殺人を乗り越えてるようで乗り越えてない薫ちゃん。  
悪夢をよく見たりするようになりますけど、それはまたの機会に。

## 森にて 2

「ばあさんや、飯はまだかい？」

「何いつてんだい爺さん、昨日食べたところじゃろ」

「毎日食べさせるよー！」

「ふえ！な、なにが？！」

「あ、あれ……？ああ、夢か。ごめん、なんでもないよレティ。おはよう」

なんか随分な夢を見た気がする。さっき食べたじゃなくて昨日かよ虐待じゃねえか。

「おはよ、お姉ちゃん」

町に着かなくて昨日は野宿した。幸い神様が用意してくれてた荷物に保存食と毛布が入ってた。

でも一人分。そりゃそうだよな、私だけのつもりだったんだから。

というわけで二人で一枚の毛布を使うことにして抱き合って寝た。  
なんとという俺得。

寝ずの番？クロとシロが危険は察知してくれるだろうからいらな  
いじゃない。

そしてよくわからない夢を見てツツコミで目が覚めた、と。

記憶消えてるけどあんな扱いうけてたのか？よくあるネタだった  
のかなあ、今となっては分からないけど。

ところで保存食がそれなりに入ってるんだけど、近くの町まで結  
構あるってことなのかなこれは？

昨日クロに聞いたのは方角だけだったしなあ。犬に距離なんてわ  
からないだろうし浮遊系の魔法でも使えたら確認できるんだけど。

「レティ、近くの町までの距離とかわかる？」

「あれ、わかって進んでたんじゃないの？わかんないよ？私は眠  
らされて連れてこられたんだし」

「クロがこつちだって言ってたから先導任せてついてきただけなん  
だけど。あんまり遠いようだと保存食が底を尽きそうだなあなんて」

「え〜………なんとというアバウトな。クロちゃん距離わかる？」

クロは首を傾げた！だめだこりゃ！！

「どうしようかなあ。こういうときは商人の馬車がモンスターに襲  
われててそれを助けて町まで一緒に！なんて展開だよねえ」



「何の話？」

「いやいやなんでもないですハイ。なんか浮いたりする魔法とかお手軽な感じの使えない？」

「私魔法使えないよ。お姉さんこそ何か良い感じの召喚獣いないの？」

ん〜、何が呼び出せるかまだ確認してないんだよねえ。

私とレティ乗せて飛べるようなのいるかないたらいいないてほしいなっつと。

ん〜……？牛人？ミノタウロスリザードマン 蜥蜴人？

なんでもありかこれ。どうやって契約するんだこの辺。個人対象なのか？いや、もうしてあるからいいのか。

こんなん呼び出して騒ぎになったりしないのか。魔物じゃなくて友好種族なのか？

あとで呼び出してみよう。とりあえず今は飛べる奴。

12ページ目。大鷲。

おいこれ普通の動物じゃねえか。

仕方ない。クロみたいに多少意思の疎通が出来ればある程度の距離もわかるかも知れないし呼び出してみるか。

「サモン ライジイゲル 召喚。大鷲！」

「……は？」

「お、お姉ちゃん？でかいにもほどがあるよ？」

見越し入道見越した！

……小さくならない！もうだめだ！

いや、確かに大驚って書いてあって詠唱にラージってあるけどさ？  
頭下げてスリスリしてくるのは可愛いけどさ？

全長5mぐらいあるんですけど？！でかすぎだろ！！

乗れる大きさがいいと言っただけださー！！

森にて 2 (後書き)

主人公：黒髪で腰ぐらいまであるストレート、黒目

白色のカッターシャツ、茶色のハーフパンツ、茶色の編み  
編みニーハイブーツ、黒の外套、リュックサックタイプの鞆

レティシア：金髪でストレート、首の後ろで一まとめにくくってある

黒いシンプルなワンピース、革靴、黒の外套

## 森上空にて

前回のあらすじ。

迷ったので空から町を探そうと飛べるやつを呼びだしたらでかかった。

体長5mの鷲ってでかすぎだろ常識で考えて！

でかけりやいってもんじゃない。でかくても鷲は鷲。

ちよつと鷲さん、私を空まで連れてって？なんて言おうもんならどう考えても爪でつかまれる。

どう見ても餌です。美味しくいただけられそうです。

後ろから首に抱き着いてみた。首が絞まったらしく暴れられた。

足に掴まってみるか？途中で耐えられなくなったらバッドエンド確定だねそれ。

「ちよつと鷲さん。ワッシーさん。私を空まで連れてって？」

「クエエエー！」

案の定お腹を後ろからつかまれて空中へ連れ去られる私。

まあでも爪が食い込んで痛いなんていうことにはならなかったから良かった良かった。

でもこれ……もしかしたら多少大きい程度なら肩つかまれてすごい痛かったのかも。

「じゃあちょっと上から見てくるね。シロ、クロ。レティのことよろしくね」

「いつてらっしや〜い」

驚だからワッシーって適當すぎたかな。

それよりも、町はどこかな〜ってか。お、あったあった。

町と呼び出された場所と、今レティたちがいる場所とで考えて……まだ三日ほどかかりそうね。

「ねえ、ワッシーさん。レティなら背中に乗せて飛べる？」

「クエエー」

大丈夫ってか。やっぱり意思疎通できるのね。

もしかして私も背中に乗れたんじゃないか？でも二人は辛そうだ

なあ。

「じゃあ一度レティたちのところ戻ってくれる？そのあと一人ずつ町まで運んでもらえるかな？」

「クエ」

「というわけだから、シロは一度戻すね。私が町の近くで降ろしてもらったらまた呼び出すわ。」

そのあとワツシーさんにレティを迎えに行ってもらって、私のところに到着後クロを送還、再召喚ということで

「はい」

「じゃあワツシーさんよろしく。クロはレティのことお願いね」

そういつて私はワツシーさんの背中に乗る。首が絞まらないように。

さっきは首絞められたから暴れただけか。ごめんねワツシーさん。

町の近くまで来たのでワツシーさんに降下してもらって無事着陸。そしてワツシーさんから降りる。

上空はあまり速度出てなかったのに結構寒かった。今後のこと考

えると防寒着も用意しないとなあ。

「じゃあワツシーさんはレティをよろしく。召喚サモン氷白狼アイスウルフ！  
シロちゃん引き続き私の護衛よろ……ん？」

なんか町のほうが騒がしいと言うか、門番の人にもものすごい睨まれてるような？

パターンの考えると「モンスターの襲来と勘違い」かな？

ハハハ、マサカ。

大通りにて

ワツシーさんがモンスターと間違えられました。

やめて！この子はいいい子なのよ！！ただちよつと大きいだけなの！

5mつてちよつとどころじゃなかったね

「お姉ちゃん！ワツシーさんと飛ぶの気持ち……どうしたの？」

レティが到着したときには門番のえらい人に謝ってた私。

「いやあ、ワツシーさんがモンスターと間違えられたみたいでちよつとした騒ぎになっちゃつて。

とりあえずワツシーさん戻すね。リターンラージイゲル送還大鷲サモンフェンリルで、召喚黒魔狼！

よし、じゃあ行こうかレティ」

とりあえず宿屋行ってギルド登録だあね。まだすごい見られてるけど気にしない！

こつというのは気にしたら負けだ！気にしたらそこで試合終了ですよー！



## 都市メルベン

入り口の門をくぐるとそのまま大通りに繋がっていて正面には大きなお屋敷。

あれが領主だか町長だかのこの都市を治めてる人の家なのかな。やっぱりメイドさんとかいるんだろなあ。

興味はあるけど（主にメイドさんに）関わり合いになることもないしまあいつか。

まずは宿屋。あ、あの屋台の串焼き美味しそう。保存食しか食べてなかったし買い食いでもしようかな。

シロとクロも欲しそうにこちらを見ている！

「おっちゃん、串焼き4つちょうだい。それとお勧めの宿屋あったら教えて？」

「おうまいど！大銅貨2枚な。宿屋なら少し行った先の『魚鱗亭』がお勧めだ」

「あんがと、そこ行ってみるね。そういやこの串って食べ終わった後どうすればいい？」

「ああん？そこらに捨てりゃいいじゃねえか」

そこらって……ゴミ箱見当たんないよ？道端に捨てろってことなのかな。燃やしちまえばいいか。

レティに一本渡して、私も食べながらシロとクロに差し出す。これ結構美味しいな。

牛肉……？それにしてもちょっと臭みがあるような？

「美味しいねお姉ちゃん。おじさんコレ何の肉？」

「これはシシ肉だよお嬢ちゃん。森を抜けてきたなら見たと思うが、1mぐらいの豚に近い動物さ。」

すごい勢いで体当たりしてくるけど上手く誘導してやれば木にぶつかってくれるぜ。肉持ってきてくれたら買い取るからよろしくな」

「見なかったなあ。じゃあその時はよろしくね。食べ終わったんなら串ちようだい、レティ。フレイムトーチ灯火」

結局ゴミ箱は見当たらなかったから串は燃やしてみた。そこらに捨てるのってすごい抵抗あるよね。

おっちゃんに街中で魔法使うなと怒られました。

大通りにて（後書き）

金貨 〓 100万

大銀貨 〓 10万 小銀貨 〓 1万

大銅貨 〓 1000 小銅貨 〓 100

日本円に直すと大体こんな感じで。

## 宿屋にて

「こんにちは。何泊かさせてほしいんですけど」

「はいらっしゃい。お一人？朝食はどうしますか？」

「二人と二匹の一部屋でお願いします。朝食はこの子達のみも含めて四つお願いします」

「二匹……？ああ、お嬢ちゃんは獣使いかい。ビーストテイマーしかも二匹連れとは珍しいね」

「そうなんですか？ちなみに他の人ってどんなの連れてたりしますか？」

「そうさねえ。ワイルドベア四つ腕の熊とか俊足豹とかかね。

変り種だと土蜘蛛ツチクモや軟体生物スライムなんかも見たことあるね」

土蜘蛛で。どんだけマニアなのよその人。

そんなんいりゃ確かに犬二匹連れてる程度じゃ問題ないよね。

「とりあえず十日お願いします。おいくらですか？」

「その二匹はあわせて一つのベットでいいね？三人部屋にしくよ。

一日大銅貨5枚ってとこで十日で小銀貨5枚ね」

「了解です。ではお世話になります。十日間よろしくお願いします。ほら、レティモ」

「よろしくおねがいします！」

「はっはっ、よろしくね。お嬢ちゃんたち。ほら、部屋の鍵だよ。部屋は二階の一番奥ね」

部屋に入ってベットにダイブ。隣ではレティもダイブしてら。さてさて、シロとクロがいるから防犯の必要はないか。

今の中に一通り呼び出してみたほうがいいのかな？でもワッシーさんみたいにでかかったらマズイなあ。

とりあえず夕食まで時間あるしギルドで登録してくるかな。

そういえば。

「レティ。今後どうする？一緒にギルドに登録して旅する？それとも何かやりたいことがある？」

旅の仲間は欲しいけれど、魔物の相手なんかをすることもあるだろうし。

シロとクロがいるからよっぽどの相手じゃないと問題なさそうではあるけれど、危険なことには変わりないわけで。

何かやりたいことがあるならそっちを優先してあげたいし。ってレティのこと何も知らないなあ。

「私はお姉さんたちと一緒にいたいです。どこにも帰る場所もないですし、やりたいことも何も思いつきませんし」

「そっか。じゃあ一緒に冒険者やるっか。で、のんびりやりたい」と探そう

「はいっ！」

ええ娘やなあ。私の着せ替え人形になることも知らんと。

宿屋にて（後書き）

三人部屋で一泊朝食付き五千円程度

## ギルドにて

前回のあらすじ。宿をとったよ！

まさか一行すら必要としないとは……。

「どうかしましたか、お姉さん？」

「なんでもない、なんでもないのよレティ……」

遠い目をしていたらレティに不審がられた。

気を取り直して、現在冒険者ギルドに来ております。

目の前ではカウンターを挟んでおっさんが説明してくれてる。

受付には見目麗しいの置いといてくれよ。奥にいるクールビューティーとかさあ！

「では、これで説明は終了です。ところでお二人とも登録いたしましたか？」

「いや、私だけのつもりですが」

「そちらのお嬢さん。魔力もそれなりにあるようですし、一緒に行動されるようなら

魔法使いとして登録されてはいかがですか？お二人同時ですと登



録料が多少割引されますよ」

「ぜひお願いします」

割引に弱いのは日本人の性なのかしら。

しかしレティに魔力がねえ？ああ、だから拉致られたのか？

「え、私魔法なんて使えませんよ？良いんですか？」

「はい、問題ありません。ではこちらのカードに氏名と職業をご記入ください」

「レティは魔法使えないけどどうすればいいの？」

「その職業欄は自己申告ですので、例えば魔法使えるのを隠したい方なんかですと戦士と書いたり、

魔法使い（になる予定）ですとか、魔法剣士（希望）、魔眼を持つ者等様々です。

勇者と名乗る方もいましたね。その方は現在勇者（笑）と呼ばれてますが」

勇者え……

職業は何でもいいのかあ。私はどうしようかな、無難に召喚士で良いような気もするけど、ちょっとボケたい気持ちも。

召喚士に絡めるとすると……あれ？意外と召喚士で二つ名持ちって思いつかないな。

「じゃあ私は魔法使って書いてどうかな。お姉さんはどうするの？」

「あゝ…召喚士で良いや。(笑)とか付けられてくないし」

結局無難な名前に。中二的な名前付けるのなんか恥ずかしいし、変な名前付けて目立ちたくないし。

それよりさつき明らかに職業じゃない名称が混じってたような。ああ言うのはどこに行ってもいるって事か！

「はい、では加工してきますので少々お待ちください」

「お姉さん、後で魔法教えてくださいな！」

「え〜つと、私は変則的な覚え方したし、人に教えるのに向いてないから魔法屋でちゃんと習おうね」

魔法屋。なんかそんな知識があった。お金払って教えてくれるのかな。

そういえば私はどうやって普通の魔法使ってるんだろ？魔法陣とかが出てるんだらうか？

召喚するときには出てくる位置に魔法陣でてるけど、普通のもそうなのかな？

「お待ちせいたしました。ではこちらに魔力を通していただいで完了です。……はい、確かに。」

紛失した場合は再発行に大銅貨一枚必要になりますのでご注意ください。

今回は二人分併せてということなので、大銅貨一枚と中銅貨八枚となります。」

「了解です。では大銅貨二枚からで」

「はい、確かに。こちら中銅貨二枚のおつりです。では死なない程度に頑張ってくださいませ」

おい最後まで適当だな。

ギルドにて(後書き)

ざつとサブタイ変更

## 魔法屋にて

魔法屋。

各種魔法を販売。地下に練習用スペースがある。

初級以外の購入には冒険者ギルドでの一定ランク以上が必要。

冒険者ギルドへ新魔法を登録・委託すると販売が開始される。

というわけでレテイの魔法を買いに来ましたよつと。

ちなみに上のは神様からインスタールされてた情報。

早く服を買いに行きたい……！可愛い服を！！

RPGとかするときはず武器から揃えてしまふ俺が今は憎い！

大きな武器を振り回す小柄な美少女って良いよね。

いや、待て。現実的に考えるとムキムキマッチョになってしまう。  
フンハア！とか言い出したら目も当てられん。

筋力強化とか必須か。そんな都合のいいもんがあればだけど。

あれ？常時かけてないとそもそも武器を持ち運べないよな？  
そんなコストパフォーマンスいいわけないよな。

装備品で筋力強化が付与されてるものがあつたりとか？

あつたらいいなあ（遠い目）。

あつても使わないけどね！  
だって前衛用装備って可愛くないし！

「お姉さん、終わったよ〜？」

はっ。遠い目してたら魔法覚え終わったようだ。  
ついでに私も呼び出して試しておこうかな。

「おつかれさま〜。私もちよつと確認しておこうかな」

さてと。黒魔狼と氷白狼、大鷲は既に呼び出したからいいとして。  
ミノタウロスリザードマン  
牛人、蜥蜴人、この辺は普通だな。  
ゴーレム  
人工巨人 土地の属性によって変化……ストーンゴーレムとかウ  
ツドゴーレムとか変わるって事か？

リッチ 不死魔導師、デユラハン 暗黒騎士……おいしい？こんなん呼び出して大丈夫な

のか？

なんかこう、イフリートとかリヴァイアサンとかそういうものじゃないの？

あれ、今更？なんかチヨイスおかしくね？

「ちなみにレティ、御伽噺とかに炎の巨人とかでかい海蛇とか出てくる？」

「ん〜、確かいたような？」

これはつまりあれか。将来的に遭遇イベントがあって契約してから呼び出せるようになるって言うフラグか。

リッチやらはどっかのダンジョンでも試すしかないか。

さすがにそんな呼び出せるのいないだろうし、他のも怪しいし

！！

神え…………。

## 魔法練習場にて

前回のあらすじ。

レティが魔法覚えてる間に何が召喚できるか軽く確認してみたよ！

とりあえず無難なのから呼び出してみましよう。

「サモン 召喚！リザードマン 蜥蜴人！」

リザードマン 蜥蜴人のページを開いて手帳を掲げる。

ちよつとかつこつけてみたけど特に意味はない。手帳に触れてたらいけるんちゃうかなあ、知らんけど。

そんなことを考えてたら私の目の前に魔方陣が現れた。こっちの普段使われている文字は読めるけど、これはさっぱり。

古代語とかそんな感じなのかな？呼び出すものによって違っつぱいけどなんか法則あんのかしら？

「ギヤギヤ、才前ガ召喚主ダナ。俺ハリザードマン蜥蜴人ノラトス。以降ヨロシクタノム」

普通だ。思ったより普通のリザードマンだ。なんというか想像通り？

でかかったり小さかったりするのかと思ったが、シロとクロは普通だからワツシーさんが規格外なだけなんだろうか。



片手剣に丸盾、全身鎧。色を付けた感じはなく無骨な鉄製と言った感じの装備。あ、タクティクスオナンドでもない。

「うんよろしくね。私は近接さっぱりだから頼りにしてるね」

「マカセロ。マモリガイガアリソウダ。今日八顔アワセダケカ？」

「そぞ。じゃあまた今度改めてよろしくね。送還<sup>リターンリザードマン</sup>蜥蜴人！」

「マタ会オウ、我が主ヨ」

魔方陣に吸い込まれていくラトス。いい人？だった、よかった。って何気に喋ってたな、人型は話せるのかな。じゃあ次いつてみよう。

「サモン ミノタウロス  
召喚！牛人！」

私の目の前の魔方陣から現れ……た……の……

「初めましてご主人様 <sup>ミノタウロス</sup> 牛人のエリザベスよ ミ  
あら可愛い娘。いゃん、私はりきっちゃわよん！よろしくねえ  
ん！」

「リターンミノタウロス  
送還牛人……」

「あらやだいきなり送還？照れちゃって可愛いんだから ミまたよろしくねご主人様！ちゅっ！」

……でかい戦斧バトルアックス持って黒いゴスロリ着たミノタウロスが出てきた。  
角に赤いリボン付けて口紅ひいてた。  
クネクネしてた。

リザードマン  
蜥蜴人がまともだったから完全に油断した。

オカマのミノタウロスとか誰得だってんだよおおおおおおおお！  
しかもどうせやたら強かったりするんだろあいつ！  
嫌がらせか！イジメか！！誰だあいつ呼び出せるようにしたやつ

！！

## 酒場にて

前回のあらずじ。

ミンタウロス

マッチョな牛人の名前がエリザベスでゴスロリファッションでクネクネしててオカマ口調だった。

なにこれイジメ？

その後なんとか持ち直し、私も攻撃魔法を一通り練習しておいた。あそこ燃やすときに使っただけでもね。

それとよく考えたら神様は「初級魔法は使用可能にしておく」と言っていたので、いずれは中級上級と覚えていきたい。

なんかやたら魔力はあるっぽいし、もしかして上級撃ち放題の固定砲台になれたりしてフハハハ！。

個人的には一撃の重さより初級を連発のほうが好きなんだけど、て今はどうでもいいか。

そんなこんなで練習場を後にして宿屋に隣接してる酒場で夕食タイム。

二人と二匹分あわせて大銅貨三枚。あ、そういやレティの魔法代は初心者用魔法一式で大銀貨2枚でした。

結構するのねと思ったけど魔法は一度覚えたらずっと使えるしねえ。明日は武器と服を見に行こうかな。

「全体的に薄味だけど美味しいなあ」

「こんなもんじゃないかな？お姉さんは濃味が好きなんだね」

むう……。やっぱり醤油とかないのかしらん。見た目中世ヨーロッパだもんなあ。

一応東に日本的なものはあるよって情報はあるんだが、輸入とかしてないのかな。

などと薄味ながらも美味な夕食を楽しんでいると酔っ払いに絡まれた。

「アナタ八神ヲシンジマスカ？」

「おい、そこは嬢ちゃん酌してくれやゲへへでしよ。意味不明な絡み方止めてください」

「おう嬢ちゃん酌してくれやゲへへ」

「そっくりそのままですか！もうちょっとひねってよ！」

「その綺麗なお嬢様、もし宜しければワタクシのコップにお酒を注いでいただけませんかしら？」

「なにこいつめんどくさい！中年禿親父のお嬢様言葉なんて聞きたくなかった！！」

「その割には結構楽しそうですね、お姉さん」

レティに呆れられた！シロとクロまでやれやれって感じの顔しやがって！

味方がいないっ！

「女将さん、こっちにもお酒ちょうだい！」

酔っ払いに素面で対応してたまるか！こっちも呑んでやる！

レティがなんともいえない不安そうな顔してるけど気にしない！

気がついたら朝になってました。

しかもエリザベス呼び出したみたいガクガクブルブル。

酒場にて（後書き）

今までのもあわせて貨幣を一新しました。

今までのだと金貨一枚一億とかになってたよ。あるえ〜？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6700x/>

---

異世界から来た召喚士の日常

2011年10月30日01時09分発行